

阪神大震災の体験

II (95・4・15)

西山 嘉雄（昭15・文甲）

文甲一の西山でございます。えらい格好で誠に失礼します。全壊しまして、解体前に取り出す物と言えば、衣類しかなかったんですけれども、医者から、私の心臓にちよつと故障があると言われまして、娘婿達が掘り出しの力仕事をやるとかで、私は立入禁止を命ぜられましたので、これ幸いと、避難先で寝ておりました。私の物等が、何処にあるか知っている者は家内一人です。で、これが又七十近いということですから、皆んなで血眼になって必死になって掘り出し探してくれましたが、何処へ何を放り込んだかがよく分かりませんで、背広を探すのが大仕事なもので三高会館へ行くのだから、勘弁してもらおうという事になりました。

三月三日には、わざわざ井垣さんが急造の仮小屋へお見舞に来てもらい、有難かったのですが、その時に前回（三月十八日）の体験談を語るといふ案内状も頂いたのですが、丁度都合悪く、その三月十八日の同時刻頃に、境界線を確定しなければならない事になっており、隣近所も全部潰れているものですから、他の人達の都合もありまして、コンクリートできっちりするとか、大工

を入れて昼頃から打ち合わせをやるうという事になっておりました。そんなんで、十八日には出席できず、井垣さんから「何しとんや、来ないで」と電話をもらった時には、その話の最中でした。大変失礼いたしました。

前回の三月十八日に、大方の話は聞いておられるだろうから、今さら、時期外れになってお話する事もないだろうと井垣君に言うたんですが、全壊しているのは、お前位なものだから喋れというので何か変な具合になってしまいました。

この三ヵ月間、社会的な関連が一切ないままに、離れ小島におった生活でしたので、本当に小さな個人的な視点からの話にならざるを得なくなりますが、ご勘弁願いたいと思います。

私は、大正九年生まれです。関東大震災の時は数えの四歳でした。子供ですから、子供心に覚えていますが、大きな木の下で、ガヤガヤとして一晩過ごしたこと位しか印象はないわけです。戦災も、兵隊（海軍の予備士官、教官配置）に行っておりましたけれど、なまに本当の生の空襲は知りません。海軍兵学校とか、鹿児島、佐世保などがどんどんやられておりましたが、やられる直前に転勤、後から後から空襲が来ました。防府にいました時に、隣の陸軍が、下手な高射砲を撃つものですから、行きがけの駄賃に兵舎を焼かれたことがありましたが、神戸、大阪、東京の無差別焼夷弾の中を逃げ回ったということもなくああいふ悲惨な経験はないわけです。

今度の震災は、何が何だか分からなかったですねえ。人によっては、横揺れが最初にきたとい

う人と、私のように縦揺れがいきなりきたという人、まちまちでした。ド、ド、ドドーンと音がきて、ガシャガシャとガラスの飛び散る音、何か背中に入ったような感じ、隣に寝ております家内が、訳も分からないことをワアワア言うとりまです。私も中腰になって、大丈夫や大丈夫やと何や偉そうなことを口にしておりますうちに、パタツとしばらく一段落つきました。二階に寝ていたんですが、別室に娘夫妻が同居しているものですから、孫達二人（中一男、小四女）合わせて総勢六名が二階に寝ておりました。下の孫が女の子だものですから、娘がその子の名前を絶叫しているのです。「アヤちゃん、アヤちゃん」と泣き叫んでいるわけです。子どもの返事は聞こえません。タンスの下敷きにでもなっているのかも分からず、こちらでも立とうと思ってても床が曲がっているのと、まだ余震がつづいていて立てないのです。裸足で、寝巻き姿ですので、横にあつたはなんてんみたいな物を引っかけ、さあという時に、娘婿が「お父さん大丈夫ですか、私とこも皆んな大丈夫です」と言ってくれたので、ヤレヤレでした。

そのとき、薄ら明かりに妙な建物が庭先にドンと見えるわけです。まさか隣の家がこんな所に飛んで来るわけがないし、変な建物があるなあと思って、ハッと気がついたんですが、それは物置なんです。いつもその物置を二階から見ているから、見下している角度の姿が頭に残っているんです。それが今は一階部分が潰れて、二階が一階になった情況で物置を見てるわけ、初めて見る風景です。それに気付いて「これは、一階が潰れて二階が落ちたんだ」ということが理解で

きました。婿さんが「待って下さい、こっちの四人を外に出してから行きますから」と言うので、「オイ、階段に気をつけろよ」なんて言っていました。後でわかったのですが、階段は潰れてしまつて無くなつてゐるのです。大笑いになりました。

ああいう時は若い者は必死になってくれました。婿さんは、二階の窓から外へ裸足で飛び出して、丁度その時に外を巡回している親子連れがおつたらしく、その親子は、懐中電灯を二つ持っていたらしいのです。婿さんは、その電灯を一つ貸して下さいと言うものの、貸して下さいではなくて、強奪に近いんですわ。外に出て行つた三畳の窓口からもどつてきて、足元を照らしてくれて、どうにかこうにか逃げ出したんです。

門の前に飛び出したんですが、裸足です、皆んな。寒さも手伝つて、娘が小鳥を抱いて震えているんです。この鳥は、下の孫娘がちよつと前から飼つてたのです。その鳥が籠に入つたまゝ二階におつたので、生きているのを婿さんが籠から取り出してきたのを抱いてゐるのです。孫娘が大事にしている鳥ですので、気になつて気になつてしようがなく、これがおらんことにはということ、母親がバジャマの胸に大事に抱いてゐるのを、そんなん放っておけとは、ちよつと言えませんでした。（この小鳥は今、仮小屋で元気です）

婿さんが近くの病院の事務の方に勤めておりまして、病院に行つて患者の無事をひとまず確認したかつたんでしよう、門の内にあつた自転車を出かけて行きました。間もなく病院の車でもど

つてきて、僕等に乗せて病院へ連れて行ってくれました。そしてベッドが二つある空病室に放り込まれたわけです。ここへ入っているのはいいけれど、さあてここで暮せるかなあとまず思いました。ベッド二つに親子六人、どうするのかなあと不安が先に立ちます。食うことよりも、それが先に来しました。履き物が無いのでスリッパを便所から借りて来たりしました。婿さんが和室が空いているから、そこへ行こうというので、三階の端っこの畳の部屋、十畳程ありましたか、そこに六人が落ちついたのが夕方でした。そこにはええ具合にコタツがありまして、テレビもありましたし、避難者としては極上の一室でした。小学校の体育館の様子などに比べて気のひける思いでした。

その前に、とりあえず脱出してから近くを巡回してみました。わが家の一階はペチャンコに潰れているんですけど、二階の方は屋根も壁も落ちていないし、柱と柱が残っていて、一階が潰れているのに、二階が全体として大きく歪んでいるけれども形は残っていて、それで助かったんだと思います。あれで屋根が落ちて梁が落ちるとか、柱が折れて斜めにガシャときてたというのであれば、少なくとも、ケガの一つや二つはしていただろうと思います。

自宅の斜め向かいに病院があります。コンクリート建てですから、立っていて当り前です。また、道路をはさんで北側の木造家屋は、大体建っているんです。（但し、見かけは建っていたのですが、やがて解体した家も二、三ありました。）ははん、俺の家は古いから潰れたのかなと思

って、よく見ると、隣（西側）の家は傾いている。一階はベチャンコです。後の家（南側）はというと、二階もグシャとして自宅よりもっとひどい。（あとで知りましたが、この家では一階に寝ていた二人が死亡しました）南側は木造という木造は大半いかれているわけです。あそこの面積南北25×30メートル、東西で80メートル位ありますかね。その界限で崩れた家の下敷きで、死んだ人が五、六人いました。それが嫌なもので、花が供えてあるわけです。ここで一人、ここでは二人、私は助かったのかなあと思うたびに何とも言えない重苦しい気分です。もともと四十九日が過ぎて大体花がなくなりました。

木造の古い家ながら二階がよそに比べてなんでこんなに骨組みが比較的しっかりしているのかなあと考えました。家の近くに、歩くと二分位の所に、工務店があるのですが、その工務店とは、何十年來のつき合いでして、上野さんというのですが、ちょっとしたことでも頼んで、相談して、どこがどうのこうのとみてもらっていました。八年ほど前に、娘達と同居するときに壁や畳を全部替えたことも効果があつたのかも分かりません。上野さんとはそういうつき合いがあつたものですから、揺れて潰れて門の前に出て震えている時に、上野さんが飛んで来てくれました。

「どうでしたか、エライことですね、これは建て替えんといけませんな」と言うような会話がありまして、ここは全部を潰して解体して、庭の隅っこに仮小屋でも作って、それから解体した後、本建築もしてくれよと頼みました。「金はこれだけしかないから、頼むで」と言う

「分かりました」と、そこが職人で嬉しいところです。金のことはどうでもよろしいとは言いませんが（笑）。解体作業も近所ではイの一番にやってくれました。

こちらは病院の特等席みたいな所に避難して別にする事はありません。問題は、地主さんとの交渉です。実際の地主は年寄りの人なのですが、実権を持っているのは、その娘婿です。この人が西隣りに住んでおりまして、全部潰れた家なんですけど、その地主さんと交渉せんなりません。こんな際ですから借地借家法の臨時処理令などがあるって、黙っていても借地権の残存期間は、こちら側の、元々の建て物通りに自由に建てられるというふうに思っていたんですがね。

さて元のようにといっても、木造の二階建てはあかん、いつ潰れるか分かりませんので、少なくとも一階は鉄筋にしてもらわなくては困る。（全部鉄筋にしようかとも考えたのですが、それは予算が不安心だし、上野さん自身も私同様に木造派なので二階は木造にすることにしました。）となると、従来の木造二階建てとは話は変わって来ます。だから地主に黙ってやるわけにはいかないうちにも思われます。こういう件は、東京で弁護士をしている僕等の同級の木村君に電話で連絡したわけです。黙って建ててもあかんかと聞くと、建物の構造が変わってくると、やっぱり一度話して円満にやらんと、後々更新する時に響くんと違うかというような話も出ましたから、地主と早く話をつけたいと思いましたが、地主の方は、何でそんなに早く家屋再建の同意書が要るのだと、つかつかってくるんです。何か企みがあったの、何が何でも同意書を取っておいで、

その上で好き勝手な建物を建てるというような、妙なカンگریを地主の方は持ったらしくて、一時は難航したんです。まあ然し、再建承諾料も受け取って話は結着し、家屋再建のメドがついてきました。

このことは、不自由な避難生活を続けることの「うっとおしさ」を払い除ける唯一の希望の灯みたいになりました。僕や家内にとつてはアト残り少ない人生ですからどうでもええんですが、かといって同居している手前がありますから、お前達、勝手に作っていけとは言えません。こちらも用意することは用意するけれども、そんなに後は長くないんだから、衣類や家具等は、別に要らんですが、若い者はそうも行きません。特に孫なんかは、早く落ちついて勉強していかないかと思うわけです。あのような避難先でドタバタした場所では、教科書を開く元氣も出ないのが当り前なんです。そういう都合はしてやらないといけないという話をすれば、孫達もああいうか、家が出来れば少しはマシな部屋がもらえらしいと希望も持つわけです。孫達もそれぞれに希望を言うて、ケンカの種になる事もありましたが、避難生活のうっとおしさの中で、明るい材料になったと思います。

そこで、やはりけなけなしではあっても、ある程度の蓄えというものがありましたので、こんなことが言えるのであつて、もしこれが家を建て直すにしても、仮に三千万要ることになって、借りてやらねばならんことになる、我々のような年金生活の男に貸し手はありません。ましてや、

長期の貸付など出来るわけがないのです。日本は、貯蓄指向が高いとか何だとかいわれておりますけど、イザという時には効くなあと思いました。例え僅かなものでも（何億とか持っている人にとっては、バカみたいな話でしょうが）我々の分際にとっては、かつかつのものがあつたということが、大きな支えになりました。郵便局の定額貯金は率がいいことなど、家内はどこで勉強したのか知っておりましてね、それを主にやっておりますので、早速郵便局に行つて、通帳を出して、利息を含めて現在何ぼになるかとたずねたら、目の前でパツパと計算してくれました。これだけあれば大体いけるなあと感じました。そういうものが無く、特に老人二人暮らしという人は救い手がないんですね。日本の国というものは、実に取り立てるものは、極めて上手に、漏らさず取り立てる。他方でわれわれの如き弱者に救済をくまなく差し出すことについては、非常に鈍感であると思います。共産党がビラ貼っているのをみてびっくりしたのですが、「個人財産の補償をやれ」と書いてあるのです。共産党が、意外なことを言っていると思いました。かたや、県・市等では、個人資産の補償はしない、これは原則であると言っています。それはそうでしょう、あの大震災の時でも、国から何一つ補償はしてもらっていないのです。原爆問題でも、それがからんでいるので、法律がなかなか難しいのです。国、地方公共団体というものは、取り立てることには熱心だけど、こういう大災害で、国民・県民を救うことについては、非常に冷淡であると思います。杓子定規であるということを感じます反面、さつきも井垣君と話していたんで

すが、日本の企業というか、職場というか、これが一番今回の地震でも面倒をみてくれていると思いました。私の限られた範囲の知っている中でもそう思いました。

例えばクロネコヤマトの宅急便というような所でも、私もNHKに暫くおったんですが、そのOB会ですとか、定年で退めた会社からは勿論ですが、婿さんの病院なんかもそうですね。アサヒビール、住友金属、IBMなんかもそうです。先ず第一に、社員の安否を確認することに努力しております。そして、被災した社員達に対して手厚く、その会社の規模に相応したことをやっております。金でやる、部屋を提供する、社宅を開放するなどして企業というものが、肉親に次いで手厚く、職場の人に対して手を差しのべていることが、体験的に分かりました。そうすると、日本は企業戦士とか、何か企業のために忠誠を尽して働くということが、時代遅れであかんのだという風潮が出て来ているとのことですが、それはそれで一理あることなんですけど、こういう具合に企業サイドから手を差しのべられると、それが、国とか公共というものと対比して考えてみますと、いよいよ頼りになるのは、企業であり職場であると思ったとしても致し方ないでしょう。国や県、市町村は頼りにならないことをますます実感させるきっかけになるのではないかと思いました。これなどは、私個人のまわりにいる人だけのことでですから、それ以外の職場では、そんなことなかったということ、会社なんて冷淡やったという所があったかも分かりませんが、私の小さな見聞の範囲ではありますが、やっぱりなあという感じは持ちました。

役所という所は、こういう時は混乱するんでしょうが、私は県立病院にずっと通院しているものですから、薬もきれたし、病院がどうなっているか、医者はどうしているかと、二日後（一月十九日）に行きましたが、やっぱり診療中止です。入院患者が多くて、手が足らんのか診療休止でした。それまで四週間分ずつ出されていた薬も出せないという。近くに市役所がありますからね、市役所を覗くとえらい長い行列が出来ているんですね。これ何ですのと聞きますと、被害届を出しているんですわと言っています。被害届を出せ等と何処にも書いてないし聞いていないけど、そんなものを出さんとあかんのかなと思って行列に並びました。職員が十四、五人程応待していました。ちゃんとデスク持って。三十分か、四十分程でやっと私の順番になりました。被害状況を申告して、全壊したとか、今の連絡先はとか、避難先はとかいろいろ聞かれるのです。それで、私が、この被害届を出せということは、市役所から公報か何かで通知してあるのかと聞きますと、上司に聞きに行くわけです。戻って来て、別にこちらからは知らせていない、皆さんが被害届を出したいというから受取っているというのです。そんなおかしなこと、この忙しい時にそんな被害届の書式等を勝手にこちらが作るはずがないでしょう、役所が作っているからあるわけ、それに書き込んで出すわけですからね。担当者はおまけに「被害届を出してもらっても、別に特権はありません」というわけです。出さないかんものか、そうでないものか位、はっきりして欲しい。忙しいのに皆んなつらい目をして来ているやないか、行列しているやないかと言う

と、黙ってしまいました。

今度は、市の地震公報みたいなのに、被災証明を出すというので行ってみました。例の如き行列で、係の前に坐ると、さきほど申しましたようなことを繰り返し言うのです。市側は、被害状況を確認したいということだけらしいのです。この被災証明書はいつくれるんですかと聞くと、これは、二月の中旬以降に市役所の受付へ来てくれたらいいと、半ペラにチェックしたものをくれるんです。二月の中旬過ぎた頃になり、所定の役所の窓口に行ったら「ここと違います、あそこに大勢並んでるでしょう、あの列の後に並んで下さい」と言うんです。腹が立ち、私自身も被災証明書が今すぐ要するというのでもありませんので、病院に帰って来たんです。するとそれから二三日して、病院気付で、私宛に市役所から被災証明書が郵送されて来ました。郵送を頼んだ覚えもないのですが、勝手に郵送して来ているんです。どうなっているのかさっぱり分かりませんが、一つの例をあげればそんな事でした。

また、解体の申請もそうでした。市役所の費用でやってくれという人は、初めから申請するのですが、これも予約しておいて順番を取るのに札をもらうのです。私のように、最初から自分の金で解体してしまおう——というのはテレビで地震担当大臣というのが「瓦礫の処理、廃材処理については被災者にはご迷惑をかけません。負担もかけません」——とある日はつきり言うたんですわ。それが耳に残っていたので、これは公費でやってくれるのであれば、早くやった方が得

だということ、工務店の段取りもあるから、早くやってしまおうと、後で返してもらえらしいからというので、早くやったんですが、暫くして、工務店から「西山はん、金額は降りないそうでっせ」と言うんです。そうか、やっぱりそんなことかと思って、市役所へ行ったら、解体処理受付というのがあるんですね。「すでに解体した者でも、ここでもいいのか」と聞くと、ここであえと言います。それで行列に並んで担当の人の机の前に坐って、「もう解体は終ったんやけど」と聞くと、そうしたらこと違うと言いますね。けど、折角来てもらったのだからと、契約書なる物を持って来て、これに関係者の判を押して出して下さいと言います。言っている事が次から次へと変って、訳が分からなくなるのです。解体費用についても、テレビで大臣は、一銭も負担はかけませんと言ったのですが、市役所では、坪二万円ちよつとしか用意していませんと言う。解体業者に聞くと、神戸市は三万五千円くらい出していると言います。宝塚等の人に聞くと、市町村によって、全く違っていることが分り、どうして解体処理の単価が市によって違うのかいまだに分かりません。神戸市は、処理に手間取り、はかばかしく行かんから坪単価を上げているのか、西宮市等は、浜へ捨てに行けるから坪単価を低くしているのか、あるいは、後で工務店から聞いたのですが、震災で土建業者への市からの新規発注工事等全く無いらしいのですね。今、つながっているのは解体処理の仕事しかないらしい。それでこの解体処理を、損でも得でもいいから受けて、仕事をつないでおかないと、一段落後には、市の発注をもらいにくく

なります。だから、今は安い値段で受けるんだということです。その力関係が強い所は単価は安くなるし、力関係の弱い市町村は、単価を上げてくるのと違いますかと言っています。なるほど、そんな事もあるんだろなあと 생각합니다。

つぶれた家からモノを掘り出すんですが、家は二面が道路に沿っているので、道路から壁を突き破ればその隅っこの物を取り出せる計算になるのですね。隅の方に、タンスか何かあって、そこに娘が、なけなしの現金を二十―三十万程おいてあるので、出したいと言います。解体工事の時にムチャクチャになったら困るので、壁を突き破ったら何とかなるのではないかと、工務店から先の尖った鉄の棒を借りて来まして若い者が（中一の孫も含めて）壁をつきました。若い時に海軍におりました時に、山すそに防空壕を掘った事を思い出しました。ドスコイ、ドスコイとモルタル壁をつきました。現金を出したいという執念です。そして成功しました。また、家内が入れ歯を寝る前に外して茶碗に入れて一階北端の洗面所に置いているわけです。それが無いものですから、冷たくて、堅い物が食べにくいので、にぎり飯が食べにくくて困るのです。歯医者 は休んでいます。三日目位に、一階の潰れている洗面所に、女の子（孫ですが）が何気なく行っ 坦です。面白半分で行ったんでしょう、しゃがんでいたらいいんですが、見ていたら下におばあちゃんの茶碗みたいなものがあると、娘婿に言うて、その辺の物を除けて、やっと茶碗に入 った入れ歯が出てきたんです。それからご気嫌が良くなりました。それまでは、いろいろとご気嫌

が悪く、そうでも大変でしたのに。そんな物が意外なことに貴重品になりました。それから壁をつついていてる時に、婿さんの車のキーを入れた小さいカバンも、北側の反対サイドにある筈から、それが無いと大変やというわけです。これが一カ所ついたら一発で出てきました。ラッキーでした。車が使えるようになりました。風呂に入るのに尼ヶ崎の一番東、大阪寄りまで行きました。これも生れて始めての体験でした。取り止めのない話ですみません。終らせて頂きます。

（追記）

さっき言い忘れましたけど、潰れて解体する前に、衣類は出すとしても、本はもう一切要らんから、一番先に住所録を見つけてくれと頼んだんです。机を窓際に置いて、その端の方の真ん中辺に住所録があつて、そんなに散乱していない筈だからと十分見て探してくれと頼んだんです。二日程してから見つかつて持って来てもらったんですが、それまでは親せきの家に連絡するにも電話番号も覚えてないから出来なかったのです。こちらは全員無事で安心していましたが、知らない先方は、ヤキモキしているだろう、TV報道では西宮はエライことになっているし、電話をかけてくれても信号音は出たらしいですが、本人が出てこない、これはあかんのと違うかとか、あるいは新聞の死亡者欄を最後まで見ても載っていないなあ、心配をかけました。

住所録が出て来たので、こちらから親せきや友達にかけましたら、向こうの反応が、心底から

安心したという大仰なものでしたので、一日も早くかけた方がよかったと反省した次第です。

ああいう災難に遭った時は、いかに先方が氣を使い、心配してくれるか、殊に親類とか、昔は悪友今や良友に、一刻も早く連絡すべきだと思いつく思いました。潰れてもすぐに掘り出せる所に置いとかなんと思いました（笑）。

（元憐タイムス出版部長）

藤岡 伍郎（昭17理乙）

今日は田中春高君から水泳部の連中でやろうということになったということで、気軽に引き受けたんですが、本多君はこれがないという事です。いま西山さんのお話を聞きまして、全壊ということですが、私の方は半壊までもいかないで、被災者づらをして話をするなんてどうも氣恥しい様な感じがするんです。ただ今後、勿論こんな地震がそうそう来ることはないと思いますし、千年はこないという説もありますが、今度は京都辺が危いという憶測もあって、かりにそういうふうな時にもし出会われたら、全壊の人も勿論ででしょうが、僕ら程度の人の方が数が多いから、或はご参考になるかもしれないかなというふうな氣もします。いろんなライフラインの復旧だとか、そんなふうな事がどんなように出来たかという事と、其の他一寸感じた事を話させて頂きます。

最初地震の当日の話ですが、勿論僕は寝てまして、何かの揺れで目が覚めました。何かの揺れと言いますか、最初縦揺れがきて横揺れとか言われていますが、私は実は全然覚えていません。とにかく最初の揺れで目をさましたのだろーと思います。最初がどうだったかはわかりません。確かに非常に大きな揺れで、子供の頃から感じていた地震はわりとゆさゆさという感じですが、かなり早い様な揺れだったという気がしてます。揺れている間は、実は何も出来なかったと思います。実際はどうしてたかと言いますと、ただ布団を被ってどうなるんだろうと思っただけなんです。暫くして揺れが収まって、大体何時も懐中電灯を頭の所に置いてあるんですが、その懐中電灯をつけて見ますと、とても起きて歩こうという気をおこさない様な状態でした。つまり人間がいくら物をちらかしてもあんなにはちらかりようがなくなつて、本当に足の踏場もないという様な状態でした。懐中電灯も余りつけておくと電池がなくなると困るので、その時、時計を見たかどうかはつきり覚えていませんが、とにかく明るくなるのを待とうと寝たままでおりました。そして余震が来たら布団を被っていると、そんな状態ですら明り、七時半頃まで寝ていました。勿論安心して寝てた訳じゃなくって、やっぱり頭に一番先にくるのが火が来たら困るということ。で家が倒れるということはほとんど頭の中になかったのです。とにかく色んな音がしたので耳はませんが、そのあたりの記憶ははつきりしておりません。とにかく火事が起つたら困るので耳だけはすましていました。つまりどこかで火が出れば人が騒ぎだすだろう、それがなければまず

大丈夫だろうというので、そういう状態で一時間程布団の中にいました。明るくなりかけてきたので起き上って戸を開けようとしたらなかなか開かないんです。ですからそういう風な状態で、もし家が壊れていたら又状況は違ったかもしれません。揺れた時最初に逃げ出したという話もあります、そういうのは多分本当の話じゃなろうと思います。大体震度が6だか7だか知りませんが、震度6位になると立って歩けないというふうな事になってますから、逃げ出そうとして多分逃げられなかったし、立ち上ったら多分倒されたんじゃないかと思っています。

これは人の話なんです、その時間でも勿論道を歩いていた人がいる訳です。後で聞いた話で、その人はなんでそんな時道を歩いていたかというと、子供が割合離れた所の学校へ通う中学生で、その為に朝五時半頃に起きて阪神電車に乗って行かないといけないので、その時間に阪神の香櫨園のガードの所まで歩いて行っていた。そしてた途端に地震がきて、それで飛ばされて反対のガードの壁にぶつかって、へたり込んで何も出来なかったというのです。多分そういう風なのが実際おこる事じゃないかと思えます。立ち上ったらむしろどこかへ飛ばされてたという風じゃないかと。

そういう状態で夜が明けまして、とにかく様子が分かりませんから、電気は勿論消えていましたし、ラジオを聞く為に電池式のラジオがあるはずなんです。寝ている部屋に机も置いていますが、そこに電池式のを置いてあるのですが、どこにあるのか分かりません。それをあきらめて、

部屋を何とか歩ける程度にしなければいけないと、そういう片づけ事をやりました。上にある物はほとんど落ちていました。電気は案外早くきたのです。午前中にきてすぐテレビがつきまして、電気がきてまず何をしましたかといえますと、ご飯を炊きました。いつご飯が食べられるかわからんということなので。ご飯を炊く為に水と米と電気がある。電気がきたからご飯を炊こうとしても水道が止っています。その時どうして炊いたかといえば、水は昨年の夏湯水があったものです。すからボトルの水を買って用意してたのが幸いにも四、五本ありました。米を洗わずにご飯を釜いっぱい炊いて、これでとにかく一、二日食べていけるといいう状態にして、その次に何をしたかと言えば、銀行へ行ったのです。銀行へ行ったのは手近に金が必要ということはありませんが、二、三万のお金がありました。実は今年の正月に車が駄目になりました、車を買う事にして、丁度その日に車を持って来るのでその為にお金が必要でした。銀行へ行くと、一キロたらずの所ですが、店は開いていました。定期をおろすとか色々ややこしい事があって、係の人がいなかったり、手続がうまく出来ないとか、その時までにはそんな大事が起っているとは思っていませんでした。

実際銀行まで行きます時に一ヶ所水道管が破裂して水が出ていた所があったり、一軒だけ全壊している所があったりしました。私の所は芦屋の中なんです、阪急よりちょっと北なんです。芦屋の一番ひどくやられていますのは、阪急から下、JRよりもう少し下で、第二国道43号線ま

でが一番やられています。とにかく外まわりを見てみますとどういう状態になっていたかと言いますと、戸が開けにくいという事は、これは家がある程度傾いているんです。大体30坪位の家ですが、その一番端の所に、実は後で見ますと地割れが出来ていました。20 cm位割れている所もありまして、その為に西の端が少し下って戸が開きにくくなっているという事があったのです。そして水も出ないのでどうするかと、炊き置きのご飯を食べて考えました。

二日程たって、風呂も入れないし一度田舎へ行こうかと、私の田舎じやなく家内の里が岐阜なもんですから、三日程して行きまして、二、三日いてまた帰って来ました。地割れがして家がどうなるかとか、水とかガスが来る時に家に人がいないと困るだろうというふうなわけで。ですから十七日地震があつて、二十一〜二十五日まで岐阜に行っていました。その前にだんだん大変な事だという事が分つてはきたんですが、それはテレビを見ていると。だけでも私の家かなり中心に近い所にあるという事はあんまり感じていなかったのです。それを感じたのは三日目にもう少し遠くまで出歩いて、国道2号線から43号線へんまで歩いて行ってみますと、完全に倒れた家が沢山あつて、焼けた所もありますし、43号線まで行きますと、皆さんよく写真でご覧になっています。高速道路が寝ちゃっている訳ですね。そういうふうな所を見てこれは大変なことだと、これは当分どうにもしようがないからとにかく一遍まず体制を整えてからという事で、西山さんのような場合と違ひまして、寝る所もありますし、とにかく風呂へ入ってゆっくり頭を冷やして

からと三日程帰りました。二十五日に戻ってまいって、それから建築屋に電話して、翌日に建築屋が来てくれました。私の家は両親が来るのでちよつとつぎたしました。もう二十年程前ですが、その時頼んだ建築屋がすぐ来てくれまして見てくれました。地割れはとにかく埋めないことには雨が降って崩れ出すと家が傾いてくるだろう。家の中はとにかく戸締りがある程度出来る様になおしましょうということで、見積りを持って来たのが十日以上後で、二月六日になってからです。細かい事を言ってもしょうがないのでとにかく頼むということで、二月八日に大工が来てなんとか戸締りだけは一応出来るように、それ迄は戸締りはガラス戸と雨戸がありますのでどっちかが可能なんです。今でもどっちかしか出来ない所もありますが、もうちよつとよく出来る様な形にやってくれまして、それから家の中で少しすぎ間がある様な所を埋めて、その後水道の工事が十二月、地震の後二十六日目に来てくれました。水道工事業が何故来たかと言いますと、段差が出来ますと下水の配管が駄目になっている。会所を最初上に持ち上げて配管をやりなおさなければいけない。水道屋さんが下水と一緒に上水道も見てくれました。上水道がいかれている可能性があり、事実いかれていました。こちらの方が調べに時間がかかりました。午前中で下水の方は済んだのですが、後は夕方近く迄かかってやっと上水道の壊れている個所がわかって直してくれてこれで水道がくればそのまま使える状態になった訳です。実際問題水道がもどつて来たのは地震の後一カ月目ですね、二月の十五日です。ほぼ一カ月たらずの間どうしてたかと言いますと、飲

む水は一応ボトルの水が生きますが、あと手を洗ったりトイレの流す水が一番量がいる訳です。それは地震の翌日歩いてた時に近所の酒屋の本宅が壊れているのですが、その人と話していたら、ちよつとそこを行けば水があるというので行ってみました。山から出てくる水が溝を流れている訳です。家から八〇〇メートル位にあるので、昔石油入れに使っていたポリタンクを持って行つてくんでくるという事をやっていました。そうしたら二十日になりますと近所に給水車が来ますよという話が出て、それは五〇〇メートル位の所で栗東から来たタンク車ですが、そういうのもらつてくるというふうな事をやって、水道が何時くるかわからないというので避難したのです。

又、芦屋に帰つて来て、知事の話テレビでやっていたのですが、大体水道がどうなるかは神戸市はめどがついている。所が芦屋や西宮はちよつとめどがつかなかった、というのは、技術系の職員がおらない、いても非常に少ないからそういう事をやる余裕がないというか、やるだけの力がないと。だけでもそれではすまないから方々の所に援助を仰いで、県として頼んで一応の目途だけはつきましたと。と言うことで一月か二月で回復するということを知事が話しをしていた訳です。実際そういう状態で、給水車もだんだん近くへやって来まして、自衛隊がかなり常駐しているとか、もつと後になると道路の真中に水栓を付けまして蛇口を六ツとか八ツとかそういうのがおかれて、そこへ行くと水が出る。それが一〇〇メートル位の所にあつたものですから、そ

ういゝので何とかまかっています。人間だんだんと横着になってくるもので、最初は飲水だけ給水車にたよって、雑用水は溝までくみに行っていたのですが、四、五日するとめんどろになつてきて、雑用にする水も給水車から取ってくるような状態になりました。こうして約一カ月で家に水道が来しました。

ガスの方は更に大分後になりました、ガスが来したのは三月の九日でした。その間で一番困りましたのが風呂に入れなかつた事です。幸い私も家内も学校関係におりましたものですから、卒業生達からどうしているかというので風呂に入りこいというのがありまして、大体四十日近くの間に十回位そういう所にお世話になりました。その場所が五、六カ所になります。そういういろんな所で風呂に入っていたのですが、その内にその一軒が電気でわかしているという事です。そう言えばと思い出しまして、昔買ったのですが、電熱でお湯が冷めないようにしておく装置がある、それを使ってやれるだろうということで、結局成功はしたんです。しかしそれをやる為に一週間位かかったのです。一週間位かかって細かい事は省略致しますが、それは水位が一定してないと具合が悪いので、一遍水をくみ出してそれをためて置いて熱して、又戻してとするわけです。所がこれが八〇〇ワットなんで、計算してみると十時間近くかかりそうなのです。どうかなあと思つたのですが、實際やってみるとそれ位かかりました。朝から電気を入れておいて、やつと夕方遅くなつて入れるようになる。その間八〇〇ワットつけばなしで随分電気代がかさむか

なあと思いました。実際二月と三月で普通だと月一万円ちよつとの電気代が、二カ月合せて七万円位取られました。これは風呂だけじゃなくって暖房も、ガスがないものですから電気を使っていますが。電気代は少しは安くなるのかなあと思ったのですが、罹災地だからといって安くはないようです。ただ二月分だけ取らないで、三月分とまとめて取りますという事でまとめて七万円程取られるという事がありました。

先程震度の話もした訳ですが、芦屋の町が大体どれぐらい壊れているかということが最近わかりましたので話をします。芦屋の町で全壊・半壊を合せて、市全体で34%位の家が壊れています。全壊が約20%で半壊が14%15%位です。私達の所は歩いてみて余り壊れてないと言った訳ですが、町全体として、岩園町に住んでいます。全壊が8%で半壊が20%位です。一番よく壊れているのは、全半壊合せて80%というのが、町でいうと三ツ程あります。大体芦屋の町は五〇位ありまして、全人口が八万人位ですから、平均にすると千六百人位ですけれども、戸数にすれば五〇〇一六〇〇位でしょう。その内で80%位壊れているのが、津知町・清水町、もう一ツ位あります。その辺では大体五〇人程度の人が亡くなっていますね。大体そういう所が先程申しました2号線と43号線の間、それから2号線とJRの間に集中している訳なんです。JRの北でも駅前の大原町なんか案外古い家が多いから、倒れているのは44%45%で、二〇人程度亡くなっています。ここは町の面積が広いせいもあるかもしれませんが。そういう風な状態で大体芦屋全体で三五〇人位

亡くなった方がいらっしやいます。先程申しました壊れた家、全壊と半壊を入れて34ゝ35%という状態になっている訳です。そうしますと平均で申しまして、震度としたら7に相当してる様なことになる訳ですね。震度は6とか7とかいろんな事がいわれますが、6と7の境目は何かというと、倒壊家屋が30%を越えてるかどうかという事なんです。すると同じ揺れでも古い家の多い所は7になるかという可能性もある訳なんです。震度というのは人間の感覚でもともと決めるものですからはっきりしたものではないので、震度でいろいろ6だ7だと言って騒いでいる人もあるんだけど、それはあまり科学的ではない様な気がしております。実際震度が余震の時にいろいろ、これ一遍だけテレビで言っていたのですが、我々はかなり揺れたと思っても、テレビで全然言わないとか、或は我々の地域で震度が1程度とかいうふうなのは、それは結局観測点というのが少なくて、しかも人間が判断するものだから、その時人が起きてるかどうかというふうなものもきいてくるんで、そのへんマグニチュードという方はまだかなりはっきりした一応の式があるんですね。これは意味があると考えるかどうかは別と致しまして、最後に結局私の家が助かったというのは運が良かったと言うことで、実は私の北隣りの家は半壊です。というのは先程申しました地割れがちょうど家の所にひっかかったんです。もう一軒北の所は全壊でこわしてしまいました。それは丁度地割れが真中を通っております。南の方は、隣りは地割れがはずれていて、その南のブロックに行きますと二軒が地割れにやられているという事で、一寸のずれで駄目

だったかもしれないというふうな状態になっている訳です。そういうのは、実は私が素人なものですから、所謂断層にひっかかっているのかと思つたらどうもそうでもないらしい。

断層が何処にあるかは色々総合して判断しなければいけなく、淡路島は非常にはつきりした断層が出ているんだけれども、瀬戸内海の北側、神戸側ではそういう断層がはつきりしていないというのと、断層がはつきりしているというのと、専門家の間でもいろんな議論があるらしいのです。我々が憶測してもどうしようもないのです。断層と関係なしに、断層がプレート範囲で決まるのかどうか知りませんが、断層の上に家を建てない方がいいのは勿論なんです。そういう断層の所で一メートルも断層のずれがあればどんな家でも壊れることは明らかなんです。そういう意味で、まあ断層が分つていればいいんですけど、そうでなくとも私達が大きな被害を受けないで済んだのは運が良かったことだけで、ということをしみじみ感じている訳です。

大体今迄、昨日あったことは今日もあると、ずーとつながって生活が続いて行くもんだというのが、我々の感覚でした。勿論戦争の時にはああいう事態がありましたけれども、これは全く別のことと思つていました。その後、今の平常の状態でも急に不連続となる事があるという事をしみじみ今回は悟らされて、まあ色々考え方が変わったと思つていたのです。例えば食器等が半分近く壊れて、かなり大事にしていた物もありました。しかし、そんな物を大事にするのは馬鹿げている、そういう食器等は新しく買うこともなからうというふうな考えになったつもりでした。そ

れが近頃になるともう少しいい物で食べたいなあとか、そういうような事もむくむくと頭をもたげて来るようで、やはり人間、価値観がある程度変ったと言っても永い間の習性は変らないものだという事も感じています。どうも大変取りとめのない話ですが終わります。

(校正に際しての追記)

震度はその後、加速度等を考慮して、客観的に決められるように定義が変更されています。その測定に震度計が使用されるようになりました。

(神戸大学名誉教授)

司会者 井垣 隆敏

毎月会館から出している「はがき通信」を二月は、皆さん、元の住所におられるか分からなかつたんですが、とにかく今迄通り出しました。一通も配達不能はなく、全然返ってこなかったのです。なにかの形で、お手元に届いたようです。

それから、これは海堀君と相談しまして、被災地区在住の同窓会員で、とにかく健在で元気でおられるということだけ分かれば、お名前を書き出そうということにして、電話やその他の方法で安否をたずねました。長い間貼り出していたんですが、その事を「はがき通信」でも知らせましたら、これに対応して、いろんな方からご連絡を頂き、またお手紙も頂戴しました。

ちよつとご披露しておこうと思います。

① 昭和四年文甲の勝村泰三さん 朝日新聞におられた方ですが、あの方の所に電話をしまして、ヤツと通じました時に、息子さんのお嫁さんが出て来られまして「風邪を引いて京都のホテルへ行つたんですが、風邪をこじらせて弱っているようです」と伺いました。旅先でお医者さんに困つてられるようだったら、三高の同窓の方に往診願おうかと思つて、ホテルにお訪ねしました。ご夫妻とも寝てられたんですが、近くのよい先生に診て貰つてゐるのとで安心して引下りました。落着かれた二月の末頃ですが、次のような印刷したお葉書を頂いています。

『このたびの罹災に際し、心温まる丁重なお見舞を頂き、本当にありがとうございます。厚くお礼を申し上げます。

一月十七日の早晩、突然の激震で、ベッドと共に揺さぶられ、重い本棚の下敷きとなりましたが、二人とも大した怪我もなく、ようやく這い出しました。しかし家財はみんな転倒して、ガラス、陶片などで足の踏み場もなく、電気、ガス、水道、電話までも絶え、殊にきびしい寒さは紙カイロでは防ぎようもなく、二人ともひどい風邪にかかりました。

三日目に、長男哲也に迎えられて京都に参りましたが、何しろ八十六歳と八十三歳、老人の風邪は永びき、以来ホテルで四十日近く療養して、ようやく快方に向かいましたので、下

記に移ることに致しました。

お世話になる有賀のゆり様は、早くからいろいろ配慮して下さり、快適な部屋に住むことができて、心から感謝しております。

西宮の家は、倒壊は免れましたが、まだガスもなく、次男の弘也夫婦らが、情報活動とボランティア達の拠点としており、そのうえ国道一七一号線の落ちた門戸陸橋の復旧作業と、近隣の家々の取り壊しなどで砂塵がひどく、老人にはとても住めませんので、当分京都に居ることになると思います。

以上、とりあえずお礼かたがたご報告まで。

草々

一九九五年二月二十七日

—

この会にも一度顔を出して頂こうと思い、四月の初めにお電話しましたら、あちらが落着いた様なので四月の七日に帰るとおっしゃってました。

② 昭和六年理甲の石丸時生さん この方も大震災による被災のため転居しますという事で、転居のご通知を頂きました。

③ 昭和七年理甲の福本光雄さんからです。

『三高会館のはがき通信をいつもいただき感謝いたしております。この度びの神戸地方の震災に際し、私も神戸市に在住しておりますが、人、家ともに無事に切りぬけることができませんでした。皆様より心配をしていただいておりますやに承はりますので会館にて適当にはりだして無事の旨回示いただきたくお願い申し上げます。全くひどい大きなゆれで命からがらとはこのことかと実感いたした次第です。

皆様の御健康と、ご多幸と会館の発展を祈念いたします

敬具

④ 昭和十一年理甲の山路俊治さんは

『いつもお世話になっております。

さて今度の兵庫県南部地震により我が家が全壊致しました。幸い二人とも死をまぬがれましたが負傷しました。云々』

と書いておられます。吹田市青葉台の方に新住所を変えたというご通知をいただきました。

⑤ 昭和十三年理甲の吉村常雄さん

『西宮の夙川地区に住んでいますので、活断層の影響で住居は半壊しました。幸い家族一同全員無事です。別棟の小さい隠居所は損害軽微で瓦葺屋根を修理すれば居住可能との判定な

ので、しばらくそちらで頑張ります。大きい家はその中解体して新築せねばなりません。
以上御報告まで』

ということでございます。

⑥ 昭和十九年文乙の宮本義純さん

『前略 此度の震災により住所変更致しましたので御届けします。旧住居は半壊、取こわしました。新住所は住宅供給公社提供によるものです。横浜市には長男、次女が近くにおりますので移りました。』

こうした方々の他にも、水泳部もいろいろご調査になり、一報、二報、三報と田中春高さんが通知を出しております。その中で

⑦ 今日予定しておりました昭和十八年九月理甲の本多文泰さんは、神戸市灘区にお住まいですが、次の様に書いてあります。

『ダメかと思った。建築後四十年の自宅は瓦おち、壁にヒビ。家財散乱。いずれ建替の予定。近くのアパートに一部屋を寝室として確保。水3Fまで運び上げるのが大変。知人六名死

亡。』

⑧ 昭和十八年九月理乙の三木政春さんは

『川西市。無事。自宅はかすり傷程度。ガスはまだ。私達の人生は、人の世のあらゆる大事件をみんな経験出来るめぐりあわせらしいという感慨で、連日、神戸、阪神間方面に出歩いています。冥途への土産だ！』

と書いてあり、お話をおねがいましたのですが、「冥途へ行かんと喋らん」ということらしいです。

⑨ 昭和十四年文甲の枝光剛郎さんは

『家族無事。家倒壊。ライフ・ライン途絶。目下、京都に逃げてきている。』
ということですが、田中春高さんとは直接連絡が取れていないとのこと。